



# 映画・本・歴史のこと

## 〈第8回〉 松本清張と昭和三十年代

有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。  
写真は、山口県下関市にて筆者撮影。  
李鴻章道は、日清戦争講和条約(下関条約)の清側代表・  
李鴻章が宿泊地から交渉地「春帆楼」まで通ったという道。

松本清張の膨大な作品群は、一九七〇〜八〇年代に二期に分けて文春から刊行された全六十六巻でも収まりきらない。松竹、東宝、東映などで映画化された作品も数知れない。父親の田中峰太郎は、米子の松本家に養子に出され、十代で家出、広島で農



松本清張(1909~1992)

家の娘と結婚する。二人で日露戦争直後の石炭景気に沸く北九州にわたる。現・小倉北区で清張は生まれ、火野葦平みたいである。ただし、彼に近づいたものの、「九州文学」の同人たちは清張に距離を置いていたらしい。一九五三年、『或る』小

倉日記「伝」で芥川賞受賞。以来、四十年近く文壇の第一線で活躍した。長短編併せて、清張に外れなしである。一九六一年、朴正熙(パクチョヒ)の軍事クーデターの翌年、作家の平林たい子は韓国の『思想界』誌で、清張の秘書は共産主義者、反米で、その手の資料ばかり集めさせ、本人はただのタイプライターであると発言した。元祖ヘイトスピーチみたいなおぼはんである。

清張作品は、怒りや抵抗、権力不信で貫かれている。横柄と小心を裏表にした。一九六一年、朴正熙の軍事クーデターの翌年、作家の平林たい子は韓国の『思想界』誌で、清張の秘書は共産主義者、反米で、その手の資料ばかり集めさせ、本人はただのタイプライターであると発言した。元祖ヘイトスピーチみたいなおぼはんである。



高峰三枝子(1918~1990)

政治家や官僚の内面をコクのあるねちっこさで描写する。黒澤明、小林正樹、山本薩夫など、かつての一流監督には権力への怒りが土台にあった。当時の子供(私)としては、怒っている大人がこわかった。でも、それが大人であることとも思った。

小林恒夫は月光仮面、多羅尾伴内、少年探偵団など五〇年代後半、東映で小学生たちを映画の虜にした監督である。その前は東宝で黒澤明の『素晴らしき日曜日』(一九四七年)、『酔いどれ天使』(一九四八年)でチーフ助監督を務めた。

清張の『点と線』は月刊『旅』に連載され、すぐに『点と線』(東映一九五八年 小林恒夫) 小林恒夫は月光仮面、多羅尾伴内、少年探偵団など五〇年代後半、東映で小学生たちを映画の虜にした監督である。その前は東宝で黒澤明の『素晴らしき日曜日』(一九四七年)、『酔いどれ天使』(一九四八年)でチーフ助監督を務めた。

しかし、これは毒殺だった。機械工具を官庁に納入する安田(山形勲)と鎌倉で静養する病弱の妻亮子(高峰三枝子)夫婦の汚職隠滅のための殺人である。安田のアリバイは完璧だ

った。この心中を不審に感じた福岡の鳥飼刑事(加藤嘉)と警視庁の三原刑事(南廣)の九州から北海道に広がるアリバイ崩しの捜査が描かれる。

被害者の乗る夜行寝台特急「あさかぜ」は東京博多間を一七時間二五分で走る。連日満員、日航の深夜便「ムーンライト」を休止に追い込んだ。後年、ブルートレインと呼ばれた列車第一号である。

三原刑事は九州からの帰京に急行「雲仙」、札幌への捜査行に急行「十和田」、青函連絡船「急行」まりも」を利用する。全編、列車の移動が魅力となっている。犯人の亮子は、胸の病気のなぐさめとして、時刻表を見るのが唯一の楽しみ

だった。その知識を使って夫のアリバイを構築する。亮子の青酸カリで最後は夫を殺し、亮子も自殺、愛読した時刻表のアップで映画は終わる。

山形勲(一九一五〜一九九六)は、東映京都の時代劇、とりわけ『旗本退屈男』シリーズ二一作品中の九作品に悪の巨魁として出演している。毎回、幕府を転覆させんとしては、市川右太衛門に斬られてしまう。ロンドンの生まれで、第一次大戦中に帰国した。

高峰三枝子は、父が筑前琵琶の宗家で、父の代稽古をするほどの腕前だった。一九五七年には南平台の邸宅を岸信介に貸していた。一九八一年、国鉄「ブルムーン」のCFに上原謙と共演する。この前提とし

て、七〇年代の金田一シリーズなど、市川崑監督との充実した仕事があった。

元夫と長男が何度も横領や薬物により逮捕される不幸と同時進行だった。

『張り込み』(松竹一九五八年 野村芳太郎) 鹿児島行急行「筑紫」に二人の刑事(大木実、宮口精二)が二時三十分、横浜から乗り込む。そこから翌夜、佐賀駅到着まで、車窓、車内風景を一二分間描写していく。ここでようやく「張り込み」のタイトルが出る。原作の秋を夏に置き

換えることで、車内の暑さが見る側をも汗ばませる。この急行「筑紫」は、『霧の旗』(一九六五年 山田洋次)でも登場する。倍賞千恵子がか上熊本駅から博多へ出る。そこから東京駅までの様子も長々と描かれる。山田洋次も助監督として『張り込み』に参加した。

話は、東京で起きた強盗殺人事件の犯人の一人石井(田村高廣)が、故郷の山口か、過去に付き合っていたさだ子(高峰三枝子)の住む佐賀市のどちらかに立ち寄るとみて、両方に刑事が二人ずつ張り込むというもの。

銀行員の後妻さだ子宅の向いの旅館二階から何日間も見張る。ラジオを客と共に皆で聴く旅館の女主人(浦辺条子)。郵便局の

積立三百円を旅館に借りに来るさだ子。毎朝、夫を、子供たちを送り出し、洗濯物を干すさだ子。女子高生、菱の実売り、金魚屋などが通っていく。夕食の買い物に行く市場のシーンは、いったい何百人のエキストラを使ったのかという大がかりなものである。クレインの俯瞰移動で市場全体を捉え、歩く高峰三枝子を丁寧に撮ってゆく。

昭和三十年代を検証したければ、この映画を見るにかぎる。この国があらゆる人や物を破壊し、すべてを金に換えようとするに至った中で、何を失ったかが全編に映り込んでいる。

映画は、二人の刑事と石井を乗せた東京行き夜行列車「西海」の発車で終わる。

銀行員の後妻さだ子宅の向いの旅館二階から何日間も見張る。ラジオを客と共に皆で聴く旅館の女主人(浦辺条子)。郵便局の

銀行員の後妻さだ子宅の向いの旅館二階から何日間も見張る。ラジオを客と共に皆で聴く旅館の女主人(浦辺条子)。郵便局の

銀行員の後妻さだ子宅の向いの旅館二階から何日間も見張る。ラジオを客と共に皆で聴く旅館の女主人(浦辺条子)。郵便局の



高峰三枝子(1918~1990)